

# 14課

12月31日

## すべてのものが 新しくなる



安息日午後 12月24日

### 暗唱聖句

すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。(黙示録 21:5、新共同訳)

すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことである」。(黙示録 21:5、口語訳)

### 今週の聖句

2ペトロ 3:13、黙示録 21:3、22、1ヨハネ 3:2、3、1ペトロ 1:22、イザヤ 25:8、黙示録 22:3～5

### 今週のテーマ

「しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです」(2ペト3:13)。聖書はこの希望を私たちに与えます。

しかしながら、ある人たちは、「新しい天と新しい地」(黙21:1)の約束は空想に過ぎず、権力者たちが大衆を従わせるために死後の世界に希望を抱くように仕向けた作り話のように思えるかもしれません。つまり、「この世では困難があるが、いつの日か天国で報いを受けることができる」というようにです。

聖書に示された未来の希望をそのように利用した人たちもいますが、そのような悪用が、新しい天と新しい地の約束の真実を変えることはありません。

終わりの時には、あざける者たちが私たちの祝福に満ちた希望を笑いものにするでしょう(2ペト3:3～7)。しかし、そのあざけりは、聖書の語ることは真実であることのさらなる証拠として、まさに〔聖書に〕預言された通りに、現実のものとなるのです。

今週私たちは、新しい天と新しい地の栄光に満ちた約束について考えます。そこには天の神殿、神のご臨在、死と涙の終わり——そして、最後に、神の愛の最終的な勝利が含まれます。

ギリシア哲学の信奉者のなかには、物質であるものは、悪いものであると考える人たちがいます。ですから彼らにとって、未来において実在の人間が存在する実在の天国は信じがたいものです。彼らの考えによれば、天国も善も、この物質的な世界で見られるような非の打ちどころのない実体のない霊的な状態でなければならないのです。彼らは、もしあるものが物質的であれば、それは霊的ではあり得ないと考えます。聖書は対照的に、天国を実体のあるものとして語りますが、そこには罪の存在によって課せられた制限はありません。

**問1** イザヤ 65：17～25、同 66：22、23、2ペトロ 3：13、黙示録 21：1～5 を読んでください。これらの聖句が語る究極のメッセージは何ですか。

イザヤ書は、もし国家としてのイスラエルが神との契約に忠実であったなら、地上はどうなっていたかについて、興味深い示唆を与えています（イザ65：17～25、同66：22、23を申28章と比較）。この地上のすべては、さまざまな命に満ちあふれ、神の当初のご計画通りに、すなわち罪の入り込む前の状態へとますます変化していたことでしょう。

しかしながら、この計画は期待通りに実現しませんでした。そこで、新しい計画が立てられ、今度は、ユダヤ人とあらゆる民族を含む異邦人からなる教会がその役割を果たすようになりました（マタ28：18～20、1ペト2：9）。このようなわけで、イザヤの預言は、教会という観点から読み直す必要があります（2ペト3：13、黙21：1～5）。

「聖書の中では、救われた者の嗣業が『ふるさと』と呼ばれている（ヘブル11：14～16参照）。そこでは天の大牧者イエスが、ご自分の群れを生ける水の源に連れて行ってくださる。いのちの木は月ごとにその実を結び、その葉は万民のために用いられる。水晶のように透きとおった川が永遠に流れ、そのそばにはゆれ動く木々が、主に贖<sup>あがな</sup>われた者たちのために備えられた道の上に影を投げている。広々とひろがった平野の果ては、美しい丘となって盛りあがり、神の山々が高くそびえ立っている。この平和な平原に、また生ける流れのほとりに、久しい年月の間旅人であり寄留者であった神の民が、その住まいを見いだすのである」（『希望への光』1929ページ、『各時代の争闘』下巻463ページ）。

ある人々は、天国自体を神の聖所であると言います。しかし黙示録は、具体的に新エルサレムにある聖所または神殿について言及しており、そこには神の御座とガラスの海があります（黙4：2～6、同7：9～15、同15：5～8）。そこには、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった大群衆がいて、神を永遠に礼拝します（同7：9～17）。

**問2** 黙示録7：9～15と同21：3、22を比較してください。「昼も夜もその神殿で」（同7：15）神に仕える大群衆の描写と、ヨハネの「都の中に神殿を見なかった」（同21：22）との記述をどのように調和させることができるのでしょうか。

天の聖所または神殿は、常に天の軍勢が神を礼拝する場所でした。しかし、罪の出現とともに、聖所は礼拝の場所であると同時に、人間に救いを提供する場所にもなりました。「罪の問題が終わると、天の聖所は再びその当初の働きに戻る。黙示録21：22で預言者ヨハネは、全能者である神、主と小羊とが神殿であるから、彼はもはや都の中に神殿を見なかったと述べている。しかし、それはもはや、造られた者たちが来て、神との特別の交わりに入るための主の家はなくなったということなのだろうか。決してそんなことはないのである！」（リチャード・M・デイビッドソン『探り、生き、教えるためのみ言葉』31ページ、英文）。

黙示録は、礼拝を受けられるお方と、礼拝をしている者たちに特別な注意を払っています。この天の礼拝は、神と小羊を中心としています（黙5：13、同7：10）。常に、また、そうあるべきであるように、キリストが礼拝の中心です。

礼拝者たちは、「大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くした」（黙7：14）者たちです。彼らは神の贖いと変える力の生きた証人です。彼らは、神ご自身と、神のなされたことのゆえに神を賛美するのです。

黙示録21：3は、「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神とな（ってください）」と言います。この聖句は他の多くの聖句を反映しています（エレ32：38、エゼ37：27、ゼカ8：8、ヘブ8：10）。神が私たちの神となり、私たちが神の民となるということは、今、この地上で生きる私たちにとって何を意味するのでしょうか。この驚くべき真理をどのように実践すればよいのでしょうか。

聖書は、神は「近寄りたがひ光の中に住まわれる方」(1テモ6:16)であり、「いまだかつて神を見た者はいない」(ヨハ1:18、1ヨハ4:12)と言います。これは、天の聖徒たちも父なる神を見ることはないということでしょうか。

**問3** マタイ5:8、1ヨハネ3:2、3、黙示録22:3、4を読んでください。これらの聖句は、神を見るという最高の特権について何を語っていますか。

「いまだかつて神を見た者はいない」(ヨハ1:18、1ヨハ4:12)と言った同じヨハネは、「わたしたちは、……そのとき御子をありのままに見る」(1ヨハ3:2、3)、そして「神の僕たちは……、御顔を仰ぎ見る」(黙22:3、4)と言っています。これらの聖句が、父なる神か、キリストか、どちらについて言及しているかは議論の余地があります。しかし、そのような疑問はすべて次のキリストの言葉の光の中では消え去ります。

「心の清い人たちは、幸いである。その人たちは神を見る」(マタ5:8)。贖われた者たちにとって天の神殿で神を礼拝するという事は、なんとという特権でしょう。すべてに優る最高の特権は、神の御顔を見ることです。

「神の民は天父とみ子とに自由に交わる特権がある。『わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている』(1コリント13:12)。われわれは神のみ姿が、自然界のみ業と人間に対する神の取り扱いとに反映しているのを、ちょうど鏡の中に見るように見ている。しかしその時には、中間にうすぐらい幕をはさまずに、顔と顔とを合わせて神を見る。われわれは神のみ前に立ち、そのみ顔の栄光を見るのである」(『希望への光』1930ページ、『各時代の大争闘』下巻465ページ)。

いくつかの今日の聖句は、清さと神を見ることに関連していることに注目してください。「心の清い人たちは神を見る」、言い換えれば、神を見る者は、「御子が清いように、自分を清めます」(1ヨハ3:3)。

私たちの天への資格はイエスの死（ひるざと）によってすでに確かなものとなりましたが、私たちは、今、この地上で、永遠の家郷へ入る備えをするために清めの過程を経験するのです。そしてその清めの中心は、神の御言葉への服従です。

1ペトロ1:22を読んでください。この聖句は服従と清めの関係について何を教えていますか。私たちが清める服従とは何でしょうか。ペトロは特に私たちの服従はどのように現れると言っていますか。

永遠に地獄の火で苦しむという靈魂不滅の考えは、新しい天と新しい地には「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」（黙21：4）という聖書の教えと相反しています。もし永遠に燃える地獄の教えが真実なら、「第二の死」は宇宙から罪と罪人を滅ぼさず、悲しみと嘆きの永遠の地獄に閉じ込めるだけです。そうであれば、宇宙は二度と創造当初の完全な姿に回復されることもありません。しかし、主を賛美すべきは、聖書がそれとはまったく異なる光景を描いていることです！

**問4 イザヤ 25：8、黙示録 7：17、同 21：4 を読んでください。この世の試練と苦しみの中にあって、これらの聖句は、私たちにどんな希望と慰めを与えてくれますか。**

人生は厳しく、不公平で、時に残酷です。私たちの愛する人たちが、冷たい死に捕らえられ残酷にも取り去られます。ある人たちは、私たちの人生に巧妙に入り込み、親切を奪い、何事もなかったかのように立ち去ります。愛する人、信頼している人に裏切られることほどつらいことはありません。

心傷つき、人生は生きるに値するのかと思う瞬間さえあります。しかし、神は、悲しみの深さによらず、私たちの頬からできるだけ多くの涙をぬぐい去りたいといつでも熱望しておられます。しかし、死も悲しみも、嘆きもなくなるその輝かしい日の来るときまでは（黙21：1～5）、私たちの悲しみの涙は流れ続けるでしょう。

私たちは、最後の裁きにおいて、神は公正と愛をもって人類1人ひとりに報いてくださると信じることができます。キリストにあって死んだ私たちの愛する者すべては、永遠に私たちと共にいるために死からよみがえります。永遠の命にふさわしくない者たちは、〔彼らにとっては〕「喜びのない」天で生きることも、燃え尽きることはない火の地獄で生き続けることもなしに、遂にその存在が無くなります。公正な神からもたらされる何物にもまさる慰めが、私たち1人ひとりを待っています。死が確実にその存在を終えるとき、贖われた者たちは喜びの叫びを上げます。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか」（1コリ15：54、55）。

主は、新しい天と新しい地において、「初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない」（イザ65：17）と約束されました。

**問5** 黙示録 22：3～5 を読んでください。私たちはどのように、額に神の名を記された者たちに加わるといふ確信を得ることができますか。

ルシファーの反逆とアダムとエバの墮落の後、神はこの2人の罪人を滅ぼすこともおできになりました。しかし、被造物に対する無条件の愛の表現として、神は、ご自身が提供するものを受け入れるすべての人を救うために、憐れみ深い計画をお立てになりました。これが、「救いの計画」として呼ばれるものであり、この計画は、天地創造の前に存在していましたが（エフェ1：3、4、2テモ1：9、テト1：2、黙13：8）、墮落直後に、エデンで初めて人類に示されました。その後、ヘブライ人の聖所の奉仕という型と影のうちに示されました（出25章）。そして、イエスの生涯、死、復活を通して完全に明らかにされたのです（ロマ5章）。

この救いの計画の中心は永遠の命の約束であり、イエスの功績に基づき、受け入れる者すべてに信仰によって与えられ、十字架において備えられました。十字架以前も以降も、救いは常に信仰によるものであり、決して行いによるものではありません。私たちの行いは、救いに対する応答の表れです。

**問6** パウロは、信仰による救いの実例として、キリストのはるか以前に生きたアブラハムについて次のように書いています。「もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書には何と書いてありますか。『アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた』とあります」（ロマ4：2、3）。これらの聖句は信仰による救いについて何を教えていますか。

このように、もし私たちは、イエスを受け入れ、イエスにゆだね、イエスのうちにある約束と新しい命を求め、そして、他の何ものでもなくイエスの功績に完全により頼むなら、救いの保証を得ることができます。アブラハムは信じ、それによって彼は義と認められました。それは、私たちも同じです。

これが、神の名を額に記されるという意味です。もし今、私たちの額に神の名が記されており、常に神から離れないなら、新しい天と新しい地においても額に神の名を書かれた者となります。

参考資料として、『各時代の大争闘』第42章「大争闘の終結」を読んでください。

「キリストの十字架は、永遠にわたって、贖われた者たちの科学となり歌となる。栄光につつまれたキリストのうちに、彼らは、十字架につけられたキリストを見る。広大な空間に、数えきれないほどの諸世界を、その力によって創造し、支えておられるお方、神の愛するみ子、天の大君、ケルビムや輝くセラピムが喜んであがめるお方、そのお方が、墮落した人類を救うために身を卑しくされたことは、決して忘れられることがない。また彼が、罪の苦痛と恥とを負われ、天父からはそのみ顔を隠されて、ついには失われた世界の苦悩がその心臓を破裂させて、カルバリーの十字架上でその命を絶たれたことは、決して忘れられることがない。諸世界の創造者、すべての運命の決定者が、人類に対する愛から、ご自分の栄光を捨てて、ご自分を卑しくされたことは、いつまでも宇宙の驚嘆と称賛的となる」（『希望への光』1917ページ、『各時代の大争闘』下巻433、434ページ）。

「大争闘は終わった。もはや罪はなく罪人もいない。全宇宙はきよくなった。調和と喜びのただ1つの脈拍が、広大な大宇宙に脈打つ。いっさいを創造されたお方から、いのちと光と喜びとが、無限に広がっている空間に流れ出る。最も微細な原子から最大の世界に至るまで、万物は、生物も無生物も、かげりのない美しさと完全な喜びをもって、神は愛であると告げる」（『希望への光』1930ページ、『各時代の大争闘』下巻467ページ）。

### 話し合いのための質問

- ① 多くの世俗的なクリスチャンたちは、この世界が永遠に続くかのように人生を生きています（ルカ12:16～21）。私たちはどのようにして、地上の思想と優先すべき天に属することのバランスをとることができるでしょうか。ルカ12章でイエスが警告しておられることを覚えて、私たちはどうすれば、世俗の思想から身を守ることができるでしょうか。
- ② 天国は地上から始まるとするなら、私たちは、家庭と個人の生活を天のひな型とするために、何をすべきでしょうか。
- ③ 永遠の命を信じない人々の悲観主義の背後にはどんな論理があるのでしょうか。未来に希望を持たなくても、「楽しく」生きているように見える人たちがいます。どうしてそのように生きられると思いますか。この人生の先にある約束なしに、満足して、生きることはできるのでしょうか。

## フィジーの影響力のあるジュースバー

ワイロアア海岸は、手頃な価格の宿泊施設、レストラン、特にバーとナイトスポットで知られる人気の観光地です。しかしコロナにより、多くのカフェやレストランは営業を停止しました。バンブーリゾートもその一つでした。

これを伝道の機会と考えた三つの地元のアドベンチスト教会は、バンブーリゾートと協力して、生体検査スクリーニング、運動プログラム、減量チャレンジ、個人的食事プランなどを提供するジュースバーをオープンしました。方言で竹を意味する「ビツ」という名のバーは、毎日、健康的で新鮮なジュースを求める地元の人々の人気を得ました。教会員たちはフィジーの人々に、特に糖尿病で苦しんでいる人々に、より包括的なアプローチができる影響力のある健康センターとなるように祈りました。このバーは、南太平洋支部の「1万人のつま先を救え」運動に支援され、2019年の13回献金の一部も受け、アルコールに代わる健康的な選択肢についての人々の認識を高めることを目指しました。

しかし、コロナの第二波がフィジーを襲ったとき、政府は、ジュースバーと共にバンブーリゾートの閉鎖を命じました。その後2週間、毎日顧客から、いつ、どこでジュースバーが再開されるのかという電話がかかってきました。そして、次に起こったことは、すべての人を驚かせました。

隣のビーチエスケープリゾートを経営する夫妻は、バンブーリゾートに人が集まっているのを見て、お酒よりジュースバーに集客力があることを知るとともに、路上でアルコールによる事件が減少していることを喜んでいました。

そして、その夫妻は教会員に連絡を取り、彼らのバーと他の施設をウェルネスセンターとして使用しないかと、申し出てくれたのです。教会員たちは当初、アルコールを提供する同じ場所でジュースを提供したくないという理由で、その申し出を断ったのですが、夫妻は、アルコールを販売しないと言ってきました。アルコールは一掃され、バーの備品は、ジュースマシーン、ブレンダー、果汁、野菜、ハーブに入れ替わりました。ビツウェルネスバーは、再び動き出したのです。

教会員たちは、神様の導かれたすばらしい道に驚嘆しました。そのジュースバーは、バンブーリゾートの利用者に影響を与えただけでなく、ビーチエスケープ



リゾートを、地域社会に希望と癒やしをもたらすセンターへと変えたのです。

今期、南太平洋支部とその他の地域に福音を広める新しい計画のために、13回献金を快くさげてくださいることに感謝いたします。

(ジョージ・クウォン)